

第 22 回大会報告記

中 窪 靖

2020年にコロナウイルスが世界中にまん延した結果、二度に亘って年次大会が開催されないままであった。それから3年経った今年、満を持して年次大会を実施する運びとなった。対面とオンラインとの二つの方法を模索した結果、再び感染者が増えた場合にも対応できるようにと、Zoom による開催を選択した。

学会のメンバーのほとんどがオンライン会議システムに精通しているとは言えない中で、会員相互の助け合いの中で無事恙無く終えることができたことに感謝申し上げたい。特に今回は、国内会員2名に加えて、海外から4名（イギリスからの3名に加えて、中国からの発表者1名）の参加があった。その中のひとりが、基調講演を担当していただいたフランセス・ホワイ特氏である。

まず、野口ゆり子氏が、ロレンスの代表作である『チャタレー夫人の恋人』を、マードックが論じた「言葉による救済」から読み解いた。氏は、ヒロインのコニーとの愛の行為の中で、森番のメラズが彼女に「触れる」ことの意味を丁寧に分析された。

二人目の内藤亨代氏は、*The Bell* から *The Nice and the Good*、そして *Nuns and Soldiers* に続く系譜をたどりながら、マードックのいう「人間の生にはいかなる外的な到達点（テロス）もない」をキーワードとして、これら三つの作品に共通の主人公の類型を論じた。*The Bell* のマイケルの類型が、*Nuns and Soldiers* の中ではガートルードとなって登場していることを指摘する一方で、同じ作品のデイジーの類型は人間の世界の外にテロスを求める典型と見て、その違いに注目した。

三人目の中国からの段道余氏は、マードックとヴァージニア・ウルフの比較研究を披露した。マードックは作家人生の初期には、ウルフとは距

離を取っていたが、次第にウルフとの共通点を浮き彫りにするようになる。それは、マードックの現代文学への批評に他ならないという論旨の発表であった。

四人目のテイトゥヴィク・アイヴァジアン氏は、作品 *The Italian Girl* の映画化の中で演出を担当し、この比較的短い作品の中に、マードックの多様な側面が現れているということを指摘した。

五人目のマライア・ピーコック氏は、マードックが民族学者のフランツ・ベールマン・シュタイナーとの出会いを通して、フランツ・カフカの作品を知るようになったことに触れて、彼女の作品の中にカフカの影響を見ようとした。

第二部においては、フランセス・ホワイ特氏に基調講演をお願いした。幼い頃、父親とともにしばらく日本で生活した体験を出発点として、氏のマードックとの出会い、オクスフォード大学で受けた文学教育、そして、キングストン大学でのマードック研究の第一人者のアン・ロウ博士の指導の元本格的なマードック研究を開始されてから今日までの研究の節目節目について、興味深いエピソードと共に熱っぽく語られた。

今回はオンライン開催という初めての試みであったが、その中で会を二部構成とした。海外からの参加希望が予想される中で、第一部（研究発表）は会員に限定したが、第二部は、広く今回のプログラムに関心のある研究者に公開した。特に第二部では、質疑応答の時間に、海外から参加した研究者から質問・コメントが寄せられ、活発な議論が展開された。これは、距離感のないオンライン開催ならではの利点といえる。次回の大会は、対面開催とすることを決定したが、今回の経験によって、今後ハイブリッド開催の可能性も視野に入れた学会運営が可能であることを会員に知らせることにもなったと思う。